

キネマ週報

昭和11年〜同14年までの希少部分を追捕。
戦前メディアの研究に必須の文献。

補遺篇 全3巻

[監修] 東京国立近代美術館フィルムセンター



昭和11年から同14年までの『キネマ週報』の内、現在確認できうる限りのものを収録した待望の追補篇！

キネマ週報

[監修] 東京国立近代美術館フィルムセンター

補遺篇・全3巻

全3巻●揃定価：本体67,500円+税（各本体22,500円） ISBN978-4-8433-3375-4 C3374 B5判/上製/カバー装

各巻の構成



25●昭和11年 ISBN978-4-8433-3376-1

収録内容=第260号～第265号、第268号～第282号（1月～12月）

26●昭和12年 ISBN978-4-8433-3377-8

収録内容=第283号～第295号（1月～9月）、第301号（12月）

27●昭和13年・昭和14年 ISBN978-4-8433-3378-5

収録内容=〔昭和13年〕第303号（1月）、第305号（1月）、第308号（2月）、第312号（3月）、第314号（4月）、第322号（7月）、第327号～第329号（9月）〔昭和14年〕第338号（1月）、第345号（3月）

キネマ週報 戦前の日本映画界で独自の地位を占めた業界誌。発行・キネマ週報社、1930（昭和5）年～1939（昭和14）年の間に、全361号を発行。『国際映画新聞』の発行元・国際映画通信社の社員であった田中純一郎が、「九州映画新聞」の主幹だった片桐植弥と組んで創刊。戦前の映画ジャーナリズム界において、『国際映画新聞』とならんで情報収集の密度が高い好文献。1935（昭和10）年の春、田中の新興キネマ入社とともに、橘高広が編集責任となり、その後は南部僑一郎、佐々元十、人見直善らへと引き継がれた。戦時下の出版統制を背景に、映画雑誌が統合を余儀なくされる前の1939（昭和14）年、最後の第361号を刊行して自ら廃刊とした。

◆戦前期メディア研究に必須

作品紹介中心の『キネマ旬報』では追うことのできない映画界のさまざまな動向を、週刊誌ならではの機動性でつぶさに記録、戦前期のメディア研究には欠かせない一級の資料。

◆映画史研究の大家・田中純一郎の原点

「日本映画発達史」の田中純一郎が若き日に創刊、壮大な著作への足がかりにもなった業界誌。

◆多角的な編集方針

映画界の出来事や企業の動きだけでなく、外国映画の輸入状況、映画技術の革新など、黄金期を迎えつつあった日本映画界のさまざまなテーマを掘り下げた稀有なメディア。

好評発売中

キネマ週報

第1期全24巻・別巻1

第1号～第259号

昭和5（1930）年～昭和10（1935）年

揃定価590,625円

（本体562,500円・各本体22,500円）

ISBN978-4-8433-2980-1 C3374



〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL .03 (5296) 0491
FAX.03 (5296) 0493
<http://www.yumani.co.jp/>
e-mail eigyou@yumani.co.jp

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年月日

ご注文書

キネマ週報 補遺篇 全3巻

揃定価70,875円(揃本体67,500円) ISBN978-4-8433-3375-4 C3374

お名前

ご住所

取扱店

TEL ()